

## 子どもの「手の働き」に関する研究 (第6報)

## 子どもの意識と実態

福山市立女短大 ○加納三千子 山本百合子 金田すみれ 西川龍也 正保正恵

【目的】 前報までに演者らは、子どもたちの日常生活や学校生活の中における教師の「手の働き」の重要性に対する認識、また幼稚園・小学校・中学校・高等学校へと教える対象年齢の違いによる認識の変化などについて明らかにした。本報では、児童・生徒の手の巧緻性や共働性の実態を把握するために質問紙調査、および動作実験を行った。

【方法】 調査・実験は小学校3年生258名および中学校2年生235名を対象として行った。対象校は広島県福山市内の小学校・中学校、各々3校ずつ選び1995年7月～9月に実施した。質問紙は、子どもの手伝いや遊びの生活経験と集中力に関する14項目を設定した。また、作業の上手さと両手の働きを見るために形態の違う3種の容器への水の移しかえと、箸を使用して大豆を移動させる動作実験を行った。水の移しかえ実験では、水のこぼし方と両手の働き方を、豆運びの実験では箸の使い方、運んだ豆の数と両手の働き方を観察した。

【結果】 ①両手が働いている(以下共働性とする)ものは、作業が上手(以下巧緻性とする)であった。中学生の方がよりその傾向が顕著であった。②箸の持ち方の正しいものは、巧緻性が優れていた。③手伝いをよくしているものは、共働性・巧緻性ともに優れていた。共働性と手伝いは、小学生においてその影響が強く見られ、巧緻性と手伝いは中学生においてその影響が強く見られた。④集中力と両手の共働性・巧緻性には、関連が見られた。また集中力は、食器を扱うような手伝いや全身を使うような遊びとの関わりも見られた。